

特 集

うつ病の臨床

第 63 回日本精神神経学会総会シンポジウム*

□ はじめに □

司 会 新 福 尚 武

躁うつ病が本総会の主テーマとしてとりあげられたのは 1932 年（昭和 7 年）の「初老期うつ憂症」の宿題だけのようである。分裂病、てんかん、神経症がくりかえし共同討議のテーマとなつたのに比べるとはなはだしい不公平といわざるをえない。

もちろん、これにはそれだけの理由があつたと思われる。とりわけみるべき研究成果のなかつたことや臨床にそれほど問題が感じられなかつたことなどがあげられるだろう。しかし、こんにち事情はかなり変化し、実際的にもいろいろ問題が生じてきている。

本シンポジウムは診断基準、生物学、精神力学の 3 本建てからなるが、いずれも今日的意義がある。治療ないし精神薬理がとくにとりあげられなかつたのは、他のシンポジウムで論じられる予定になつてからである。

さて歴史的にみても、躁うつ病の概念内容には不一致の点が多く、実際の診断でもその基準はかなりまちまちである。このことはつまりは本病の臨床的 Wesen と Abgrenzung とにかかわるものであるが、これについて

違った角度からの代表的意見を聞いて再考してみたいというのが第 1 の「診断基準」である。

うつ病の本態の解明は遠い将来のこととしても、それが生物学的基礎をもつことの確からしさは分裂病の比ではない。実際、この方面の研究の不十分さは精神医学の恥といつてさしつかえないかもしれない。わが国の現状はとくにそうであるが、将来の研究の土台ともなり、また研究者相互の理解を深める機縁ともなることを願つたものが第 2 の「生物学的研究」である。

しかし、うつ病を単なる生物学的事象、単なる身体病と同一視することはできない。このことは毎日毎日の臨床経験がもつともよく教えてくれる。それならばその複雑な、ある場合には奇異ともみえる心理的構造はどう理解したらよいのか、とまどうことが多いが、これについて精神分析的立場、あるいはその他の力動心理学的立場からの研究はどこまで進んでいるのか。私自身は症状形成の精神力学を考えているが、しかしもつと進んで、うつ病の発生そのものの精神力学を考えるものもあるかもしれない。これが第 3 の「精神力学」である。

できるだけ明快で卒直な話し合いがなされ、今後の研究発展のためのよい刺激、よい交見の場となることを期待したい。

写 真

左：司 会 新福尚武氏（慈恵医大精神科）

右：副司会 伊藤 斉氏（慶応大学神経科）



* 第 6 分科集会，1966 年 4 月 8 日 於：東京国立教育会館